

介護ニーズ及び介護予防ニーズの把握の考え方について

〈1〉 アンケート結果データの活用目的

- ① 自立から重度の要介護まで、多様な状態像を含む対象者において、要介護状態に移行するリスク要因がどのように分布しているかを把握し、体系的な介護予防施策の検討に活用する。
- ② 介護サービス未利用者及び元気高齢者から、要介護状態に移行する可能性の高い者（ハイリスク保有者）を抽出し、要介護者出現率の算定に活用する。

〈2〉 分析の前提

- ① 高齢者の状態像やリスク要因の分布の全体像を把握することが必要である。このため、高齢者一般調査、若年者調査、介護サービス未利用者調査、介護サービス利用者調査に共通項目を盛り込み、横断的な分析を行うものとする。
- ② 要介護状態の悪化の背景には、転倒骨折、低栄養、閉じこもり、活動意欲の低下など多様なリスク要因が考えられるが、これらを個々に分析するのではなく、どの要因がどの程度影響しているのかを全体として検討する必要がある。このため、多変量解析※を用いて、「要介護状態の程度」という目的変数と、「リスク要因」にかかる複数の説明変数との関連を一度に分析するものとする。
※現段階の（案）においては、手法として重回帰分析を想定している。

〈3〉 基本フロー（次ページ参照）

- ① 目的変数を「要介護状態の程度」（自立～重度の要介護者まで、5つ程度のカテゴリーを想定）、説明変数を「リスク要因諸項目」（プリテスト結果を踏まえて選定）として、重回帰分析を行う。
- ② 決定された重回帰方程式に各対象者の回答結果を代入することにより、対象者ごとのリスク得点を算出する。
- ③ ②を目的変数である要介護状態の程度ごとに積算し、それぞれのグループにおいて最小値から最大値までの範囲（レンジ）を算出する。
- ④ ③のレンジ間の重なりを調整し、リスク得点を一元的に尺度化する。
- ⑤ 介護サービス未利用者及び高齢者一般調査から、④の尺度における高得点者を抽出し、要介護状態に移行する可能性の高いハイリスク保有者として、その出現率を算出する。

【基本フロー】

プリテストの結果を踏まえ、目的変数及び説明変数を設定。

<重回帰分析>

【説明変数（例）】

活動能力の高低

入院歴の有無

低栄養の度合い

睡眠障害の有無

転倒経験の有無

閉じこもり傾向の有無

うつ傾向の有無

家族との同居の有無

活動意欲の有無

説明変数ごとの寄与率
（係数）を算定

【目的変数】

要介護状態の程度
（自立～最重度）



【重回帰方程式（下記イメージ）の決定】

要介護状態の程度 = (係数1 × リスク要因1) + (係数2 × リスク要因2) + … + 誤差

<リスク保有の程度の尺度化>

各対象者のリスク得点を要介護状態の程度別に積算



要介護状態の程度別に、得点のレンジを決定（※下表はあくまでもイメージ）

要介護状態の程度	1（自立）	2（虚弱）	3（軽度）	4（中度）	5（重度）
得点のレンジ	19 点以下	20 点～39 点	40 点～59 点	60 点～79 点	80 点以上

介護サービス未利用者及び高齢者一般調査からハイリスク保有者を抽出し、出現割合を算出